

平成30年度業務運営懇談会議事要旨

1 日 時：平成30年5月16日（水）14:00～16:35

2 場 所：独立行政法人農林水産消費安全技術センター本部7階大会議室
（さいたま市中央区新都心2-1 さいたま新都心合同庁舎検査棟）

3 出席者：

◎座長

木村 真人 独立行政法人農林水産消費安全技術センター 理事長

○外部有識者

阿久澤 良造 日本獣医生命科学大学 学長

川島 知之 宮崎大学 農学部 畜産草地科学科 教授

戸部 依子 公益社団法人 日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会（NACS）消費生活研究所 所長

野口 章 日本大学 生物資源科学部 生命化学科 教授

與語 靖洋 公益財団法人 日本植物調節剤研究協会 研究所 技術顧問

（欠席）

川上 和久 国際医療福祉大学 教授

高野 克己 東京農業大学 学長

○説明者等

朝倉 健司 理事

山本 実 理事

小島 恒夫 理事

二階堂 孝子 監事

碓井 憲男 監事

原 弘幸 有害物質等分析調査統括チーム長

大貝 真弓 認定センター所長

森山 修実 企画調整部長

坂東 俊明 総務部長

近藤 浩 消費安全情報部長

小林 一博 規格検査部長

田村 正宏 表示監視部長

荻野 喜江 肥飼料安全検査部長

石岡 知洋 農薬検査部長

4 議事次第

- (1) 開会（理事長挨拶、委員紹介）
- (2) 議事
 - ・FAMICのトピックス
 - ・平成29年度プロセス評価対象取組の紹介と業務実績自己評価概要について
 - ・平成30年度目標と事業計画の紹介
- (3) 全体をとおした委員との意見交換
 - ・平成29年度業務運営懇談会委員からのご意見への対応の説明
 - ・意見交換
- (4) 閉会

5 質疑応答：

(2) 議事・FAMICのトピックス

外部有識者	新しいマネジメントシステムのリスクの管理について、一般的なQCサークルとの違いはどういった点にあるのか。
説明者	法人全体のマネジメントシステムの中での活動であり、リスクについて管理しPDCAサイクルを回していく取組である。改善改良の機会についても見逃さないため新たな取り組みとして、組織全体で機会を管理していくということを始めた。
説明者	QCサークルは一般に下から積み上げて業務の改善を実施していくものと理解している。FAMICの場合は農林水産省から示された数値目標の達成に向けた現場段階での創意工夫といった取組みもあるが、これとは別にFAMIC自身や他の研究機関が開発した分析法などを科学的検査法として実用化していく業務などに年度当初から予算配分してプロジェクト的に改善の機会として管理していくものがある。このようなものはトップダウン的な側面もある。
外部有識者	認定センターの設置について、「国際的に通用する認定制度の確立」とあるが、国際的とは具体的に指す地域があるのか、また、相互認証の機関は何機関あるのか。
説明者	認定センターはISO/IEC17011に基づき認定を実施し、その認定業務が適正であることを証明するためIAFやILACに加盟し相互認証を受けることとしており、全世界を対象と考えている。認証機関を認定する機関が加盟するIAFは約70機関、試験所等を認定する機関が加盟するILACは約65機関が全世界で加盟。

(2) 議事・平成29年度プロセス評価対象の取組紹介と業務実績自己評価の概要

外部有識者	肥料の農水省からの緊急要請業務におけるクロピラリドの分析の対象は堆肥か。
説明者	対象は堆肥である。
外部有識者	残留農薬分析について「40業務日以内で報告」とあるが、これについての実績はどうだったのか。
説明者	試料を採取し、分析し報告するまでの業務を40業務日以内に実施という目標を掲げており、平成29年度実績としては全て目標をクリアしている。
外部有識者	防除暦をもとに使用農薬を想定することだが、年次によって発生する病害虫が違い使用する農薬も違ってくると思うが、その場合は発生予察情報等で補正するのか。
説明者	本調査では、農家はその年に実際に使用した農薬が、使用方法どおりに使用されたかを調査している。防除暦を利用するのは、翌年度以降の調査業務を充実させるために、使用されそうな農薬を事前に把握し、分析可能農薬であるかを確認するためである。
外部有識者	プロセス評価対象の説明資料の「6. 安全性確保に関する検査等業務」中に「チーム体制による事務局運営に移行」とあるが、どのように行ったのか。
説明者	飼料部門の調査研究業務の取りまとめ等に係る事務について、これまでは特定の担当者が事務局として進捗管理等を行っていたが、負担が大きかったため、複数課の複数の者で分担してチーム体制により行うようにしたことにより改善された。資料中の表現を考えたい。
外部有識者	プロセス評価対象の説明資料「7. 工程管理及び品質管理等に関する検査等業務」中で、なぜELISA検査の合理化対象が台湾だけなのか、その理由を示すことにより問題が明確化され次のプロセスにつながるのでは。 また、自己評価書資料の p 26中で必要に応じた技術的指導を行っているとあるが重要なことであり、その指導事例、指導方法にプロセス評価の対象となるシーズがあるのではないか。

さらに、農水省からの飼料の緊急要請業務で肥育牛のゼラノールを分析しているが、現在の記載内容だけでは判然としない。背景を含めて解り易く記載してはどうか。

説明者

輸出検査件数が最も多く全体の約半数を占める台湾向けでELISA検査を実施していたためである。米国やEU向けについてはすでにELISA検査は要さない。誤解を与えないよう資料の書き方を工夫したい。検査等業務での技術的指導については、実施した内容が特筆的な実績となりうるものか検討してまいりたい。

説明者

ゼラノールの分析については、肥育ホルモンの使用かかび毒由来なのか確認するというリスク管理措置の一環として飼料について実施されたものだが、その記載については工夫したい。

技術的指導の実施については、プロセス評価の貴重なシーズが埋まっていると考えている。今後、マネジメントシステムで機会の管理を行う中で改善につながる取組がないか考えていきたい。

輸出検査については、輸出検疫の二国間の協定が輸出先国によって条件が違うことから、このような対応となっている。

外部有識者

自己評価書の農薬の使用状況及び残留状況調査の指標において、分析値が残留農薬基準の50%を超えた場合の処理期間に関する記載があるが、50%を超えたものがあったのか。

説明者

この記載は目標の考え方を示すものであり、基準の50%を超えた場合は、再分析するためその期間は40業務日以内には含めないとしている。平成29年度は、50%を超える事例はなかった。

外部有識者

FAMICに認定センターを設置したことについて、外部への周知方法はどのように実施したのか。

説明者

今後FAMIC広報誌、ホームページ等を利用し周知を図っていく予定である

外部有識者

プロセス評価対象の説明資料の「JAS規格の制定等に係る業務」中の「ウンシュウミカン中のβ-クリプトキサンチン」が国内外において製品の強み発揮に活用出来るとあるが、何か基準値があり、それを超えるとよいといったものか。

説明者

β-クリプトキサンチンは機能性成分であり、食品に表示するため

の基準が消費者庁で設けられている。これを表示するためには、含有量の測定が必要だが、妥当性確認の取れた分析法がこれまでなかったため、今回、FAMICで妥当性を確認し、JAS規格として利用できるようにしたものである。

外部有識者 プロセス評価対象の説明資料の「情報セキュリティ対策の推進」中の「業務外のPC利用」とは何か。

説明者 これは、業務外のウェブサイト閲覧のことである。

外部有識者 自己評価書の特筆事項としたプロセス評価の記載について、工夫や貢献といった観点毎に記載し、読みやすくして頂きたい。また、特筆事項としなくても、工夫や貢献がなされたところは、それを記載することにより全体の印象が良くなると思う。

「自己評価は妥当か、という観点から意見を頂きたい」ということであったが、妥当という観点ではなく、自己評価によって全体にどのようにプラスなるかという観点から考えるべきではないか。

説明者 プロセス評価説明資料のポンチ絵を活用し、工夫や貢献とした内容をPRしていきたい。特筆事項以外でも創意工夫を行ったところは、記載しているところだが、これからも記載を工夫していきたい。

外部有識者 情報セキュリティ対策の推進において、テスト問題が毎週金曜日に表示されるとあるが、こういったものなのか。

説明者 PCでウェブサイト閲覧をする際に、目的のウェブサイト画面が表示される前に、4択のテスト問題が表示され、その問題に回答して、解答を見てからでないと、目的のウェブサイト画面が表示されない仕組みになっている。

外部有識者 アウトソーシングの件数が1件減っているのはどのようなことか。

説明者 JAS法改正前には、原案作成委員会において、JAS規格改正にあたって消費者意見を規格改正に反映させるためのアンケートをとる業務があり、それをアウトソーシングしていた。JAS法が改正されて原案作成委員会の体制が変わり、JAS調査会において消費者の意見が反映されることとなったため、アンケートをとる必要がなくなったことによる。

(2) 議事・平成30年度目標と事業計画

外部有識者	農薬の再評価制度の導入により業務量が増大すると思われるが、どのように対応していくつもりなのか。
説明者	農水省と協議しながら既存業務について効率化できるものはないか検証し、新たな業務に対応していくこととしている。
外部有識者	平成30年度の業務の実施において、頑張っていきたい点や目標達成に困難が予想される点などお聞かせ願いたい。
説明者	ご質問の点については今まさに議論しているところである。現在、具体的に提供できるものはないが、今後、機会の管理を行いながらしっかりと取り組んでまいりたい。
外部有識者	JAS法関係業務の目標において、国際会議での議論に積極的に貢献することが追加されたことを評価する。今後、プロセス評価の導入により職員のモチベーションが上がり、国際会議でも議論していける人材が育っていくことを期待している。
説明者	国際化に向け職員の意識を変えるのは中々大変なことだが、講習会の開催や農薬GLP業務に従事している者を講師とし国際会議における英語やコミュニケーションに苦労した話を聞かせるなど、FAMIC内部で工夫しつつ対応を進めているところである。
外部有識者	農薬の平成30年度目標に、作物群全体で農薬登録できる仕組みを導入するための検討について記載されているが、具体的作物は記載されていない。30年度の状況をみて今後絞り込んでいくということなのか。
説明者	作物群での農薬登録については、平成29年度から果樹類について導入され、現在野菜類の導入について検討されているところ。その他の作物については、今後、農林水産省の進捗にあわせて検討を進めていくため、敢えて具体的な作物名までは目標に記載していない。

(3) 全体をとおした委員との意見交換

外部有識者	認定センター設置を広報誌やホームページで広報していくとのことだが、かなり重要なイベントであると思うのでマスメディアを利用して報道してもらえそうな方策を考えてはいかがか。 また、FAMICの研究報告や広報誌について出版の実績が業務実績に
-------	--

記載されているか。公開調査研究発表会についても記載すべきではないか。

説明者 研究報告及び公開調査研究発表会は業務実績に記載していない。広報誌については、自己評価書の業務実績に記載している。

説明者 プロセス評価が導入されたことも踏まえて、成果をより具体的に周知するということが必要であり工夫したい。

外部有識者 部門毎の研究報告は合本してコスト削減出来るのではないか。また、1部門だけ印刷会社が違うので、この辺を検証してコスト削減してはどうか。

説明者 合本については部門毎に配布先や印刷部数が違うこともあり、経費を踏まえて検討して参りたい。

外部有識者 アジア諸国の畜産の躍進がめざましいと感じている。アジア諸国の飼料関連者がFAMICの業務についても注目すると実感している。英語のホームページをもう少し充実させたら海外の人もたくさん見ることが出来ると思う。

説明者 飼料関係では、OIEコラボレーティング・センター活動の一環としてホームページに法令等の英訳版を掲載しており、充実を図りたい。

説明者 FAMICのパンフレットについては、国際化に対応するため英語と日本語を併記するよう変更した。

外部有識者 調査研究業務の中で論文を書いているようだが、複数あればまとめて博士号を取得することを進めることは可能なのか。国際化を進めるにあたって、海外では博士号を持っていないと話を聞いてもらえないこともある。

説明者 研究成果を論文にすることはレギュラトリーサイエンスを担っている立場としては重要な観点であると考えている。また、博士号取得につながることであれば、本人のモチベーションにつながり、重要な観点だと思っている。

説明者 韓国の農薬学会では、博士号取得がレギュラトリーサイエンスを進める上での免許となっている。このため、日本の学会では学术论文になり難いテーマ（例：残留農薬の分析）でも学会発表、論文化を奨励

し博士号取得を後押ししている。このように、学会と相互的にならないとFAMICだけの努力では博士号取得ということは難しいと感じている。

座長

最近の調査研究は高度化しており、農研機構食品研究部門や農業環境変動研究センターとの共同研究を実施していることもあり、論文とするチャンスはあると考える。長期的な展望だが、レギュラトリーサイエンスに関する論文については理解ある先生方に助けてもらいながら進める必要がある。

5 閉会

座長

本日は、様々な貴重なご意見をいただき感謝申し上げます。特に、今回は施設も見ていただいた所でもあり、是非お帰りになったら学生にもFAMICをご紹介いただきたい。頂戴したご意見については十分に検討し、今後の業務改善に活かして参りたい。

今後ともFAMICへのご指導・ご支援をお願いする。